

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 6 月 28 日現在

機関番号：35403

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370648

研究課題名(和文) 英語のオーラル・プレゼンテーション活動を通じた協働学習の理論構築とその効果の検証

研究課題名(英文) Construction of a Theoretical Framework for Collaborative Learning Activities through an Oral Presentation and Performance (OPP) Event and Examination of Its Pedagogical Effects

研究代表者

三熊 祥文 (Mikuma, Yoshifumi)

広島工業大学・生命学部・教授

研究者番号：10239212

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、複数の大学の教員が連携して英語学習者の口頭パフォーマンス向上のために実施する、Oral Presentation & Performance (OPP) の教育効果を実証的に検証し、そこでの協働学習を理論化・モデル化することを主目的とした。初年度はアンケート調査を実施、2年目にはその分析結果を国内の学会で発表するとともに、同年のOPP参加者を対象に半構造化面接法による面接調査を実施した。最終年は面接データの分析結果を海外の国際学会で発表し、仮説モデルの洗練とOPPの教育効果の多角的な検証がなされた。また適切な機材を用いた次の指導に繋がる実技記録法が開発できたことは大きな実践面の成果である。

研究成果の概要(英文)：In order to verify the pedagogical effects of the Oral Presentation & Performance (OPP) and thereby to construct a theoretical model for the collaborative learning occurring there, we conducted a questionnaire survey with the students participating in the 2014 OPP. This led to a presentation at a domestic convention in 2015, which contained a hypothetical model which explains OPP's pedagogical effects. We proceeded to use semi-structured interviews with 12 of the participants of 2015's OPP for the purpose of exploring the validity of the model. We have concluded that the OPP's pedagogical effects are solid and the results of the research were presented at an overseas international convention. We have also been successful in proposing a style of conducting the event using recording equipment that provides a resource for future use.

研究分野：Speech Communication in English Education

キーワード：オーラル・プレゼンテーション パフォーマンス 学習論 指導法 協働学習 アクティブ・ラーニング 祭り

### 1. 研究開始当初の背景

本研究の実施グループは **Oral Presentation and Performance(OPP)** と称し、代表者及び分担者全員が所属する大学英語教育学会 (JACET) 中国・四国支部に申請者たちが呼びかけて 2008 年に結成された。OPP 研究会発足のモデルとなったのは、JACET 関東支部に設置されたオーラル・コミュニケーション研究会 (OC 研究会、代表: 文教大学塩沢泰子教授) である。OC 研究会ではドラマやスピーチを中心に、指導した学生が発表を行う **Oral Communication Festival** という大学間連携イベントが十数年にわたり実施されてきた。

これをモデルに、OPP 研究会でも、各研究メンバーが英語発表技能の養成を目指す授業等で行った取組みの成果を発表するイベントを 2009 年度から毎年開催し、徐々にその成果を蓄積してきた。研究会発足の目的は、1) スピーキングや発表技能養成に向けた指導方法の開発とそれを教員相互で学び合う場を確保すること、2) 具体的な目標 (発表内容) を設定し授業に取組むこと、3) 協働学習を通じ学習者自らが作り出す創造的な学習活動を発展させること、4) 本物 (authentic) の英語使用を意識した学習とそれを披露する場を提供すること、そして、5) このようなイベントへの参加が学習者の能動性や自律性を育むことに繋がるかどうかを検証すること、である。いわゆるスピーチコンテストのような競争はまったく意図していない。これまでのイベントでは寸劇やスピーチ、それに映画のアフレコの実演、インタビュー等による調査活動、ミュージカル等、様々な形態の発表が披露されてきた。参加大学数も初回の 6 大学から昨年度は 8 大学に増えた。取組みの成果は研究会ウェブサイト (URL は「参考文献」欄に記載) や報告書により紹介しており、申請者たちはこの取組みに学習者の大きな変化と言語教育としての確かな価値を実感している。

### 2. 研究の目的

本研究の鍵語は、英語による「オーラル・プレゼンテーション (oral presentation)」と「パフォーマンス (performance)」である。本研究のメンバーは 8 年前から大学間連携で行う英語の発表イベントを実施してきた。このイベントに向けた協働学習の取組みが、他では得難い教育効果を学習者にも教師にももたらすことをメンバーは実感してきた。本研究の目的は、1) この印象的な効果を、近年の応用言語学、コミュニケーション学、英語教育学の理論に基づいて実証的に検証し、2) 学校間連携による開放型の協働学習の意義を理論的に裏付けること、そして、3) どのレベル及びタイプの英語学習者にどのような口頭発表の指導法が相応しいかを考察すること、であった。

### 3. 研究の方法

本研究は、「準備」(初年度)、「実践評価」(2

年目)、「研究成果のとりまとめと提言」(3 年目)の 3 段階で行った。準備段階では協働学習を含む社会構成主義を主とする理論についての研究会を開催し、併せてデータについて検討した。実践評価段階では個々の研究者が年間を通じて OPP イベントに向けた協働学習による授業を実施し、3 種類の実証データ (授業観察記録、学習方略と学習動機に関するアンケート調査、及び面接調査) を収集した。研究成果のとりまとめ提言段階では研究の総仕上げを行い、論文や口頭発表等を通じて研究成果を公表し、研究成果を英語教育関係者に広めるよう努めた。

### 4. 研究成果

上記の目的と計画に則り、3 年間の研究を順調に実施してきた。研究開始までに 6 年かけて熟成してきた実践的土壌の上に OPP イベントさらに積み重ね、指導法も一定の確立を見つめる。OPP 英語学習における OPP イベントの効果の理論化は上述の実証データを定量、定性の両面から分析を行い、OPP による学習効果を理論的に説明できるよう試みた。

1 年目は OPP イベントの教育的効果を考察するための理論的基盤を確立することが主眼であったが、まず OPP イベントの教育的効果を論じるための理論的基盤を構築し、その議論のための言語を獲得するため、動機づけに関しては田中 (2014) の論考をもとに「授業活動レベル」「英語授業レベル」そして「特性レベル」の 3 段階に区分する分析の視座を適応することとした。さらに協働学習の議論を深めるためには江利川 (2012) およびバークレイ他 (2009) を基盤とし、OPP の効果を総合的に説明するモデルとしては三熊 (2013) における「祭り」の概念を参考にすることで研究の足場固めを行った。また並行してそれまで継続していた OPP を引き続き実施することにより、次年度の分析検討に委ねることとなるデータをアンケート法により収集することができた。OPP の実施については継続的に行っており、本研究 1 年目にも例年通り執り行い、参加者を対象とするアンケート調査を実施した。

この調査結果に基づいて、研究 2 年目には、「Oral Presentation & Performance(OPP)のイベントを通じた共同学習活動とその教育効果の理論化」(岩井他 2016) と題する論文を発表した。この論文の要旨は以下のとおりである。まず 7 名の教員 (6 大学) の指導した学生を対象に事前・事後でアンケート調査を実施し、主に動機づけと協働学習の視点からその教育効果を検証した。その際、理論的背景として動機づけでは「授業活動レベル」「英語授業レベル」そして「特性レベル」の 3 段階に区分し、協働学習では「祭り」の概念を導入した。定量データ分析の結果からは参加者の動機づけは「特性レベル」にまでは至らなかったものの、前 2 段階の動機づけには一定の成

果が見られたこと、自由記述の定性データ分析からは協働学習に関して「協働学習による創作活動」などで評価が高かったこと、学習者に「やればできるんだ」という有能性を引き出すこと OPP は有意に機能していると思われること、自律性、関係性についても、有意な違いとまでは言えないものの、ある程度貢献していると考えられることなどが示された。この調査結果に基づき、岩井他 (2016) では OPP の指導効果を理論的に説明するための仮説モデルを図 1 のとおり作成した。

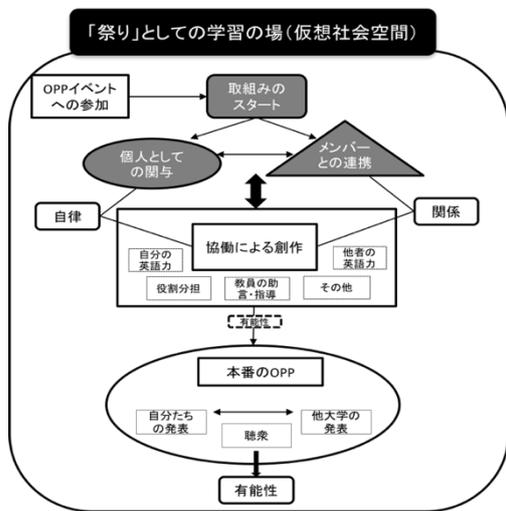


図 1

上記の研究結果はアンケート法による定量データによるもので、学習の背景に存在する要因を探索する目的は果たしたと言えよう。しかし、これはあくまでも内在する要因の探索が目的であり、仮説には定性データ (インタビュー) を用いて、より深く検証することが必要であると判断した。また、岩井他 (2016) のモデルでは「祭り」の興奮が持続可能な学習効果をもたらしているかどうか不明である。こうしたことから、OPP の体験が学習者に何をもたらしたのかを知るには、OPP 参加者個人個人をより深く、時間をかけて調査することが必要と判断した。

このことを踏まえ、3 年目のプロジェクトでは上記をさらに発展させ、半構造化面接法 (Heigham & Croker, 2009 など) を用いて、OPP 参加者に対する面接調査を行った。具体的には、2015 年度 OPP の全参加者のうち 12 名を対象にして事前・事後の面接調査 (1 人 20 分程度の教員によるインタビュー調査) を実施、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (Modified Grounded Theory Approach (木下 2003, 2007) に基づいてそれぞれの記述データに理論的概念を付与し、分析に当たった。さらに概念を絞り込み、「参加の印象」「準備過程」「OPP の効果」「練習効果」「発表することについて」「有能性」「関係性」「自律性」「動機づけ」「再参加意欲」からなる概念カテゴリーを抽出することができた。その結果、定量データ分析では裏付けが十分できなかった「OPP を通じた協働学習の取り組みが学習者

の心理面 (動機や 3 欲求、さらに継続的な学習) に与える影響」について、より緻密な分析が可能となった。以下が抽出された概念分類である。

- ① 自律性 (継続的英語学習への意欲と実践)
- ② 関係性 (直近の所属コミュニティにおける協働)
- ③ 有能性 (実践可能性への満足、期待)
- ④ 他大学との関係 (直近の所属コミュニティから 1 つ外への関係の開放)
- ⑤ 練習効果 [プロセス]
  - a. 言語面 (英語技能面での効果の実感)
  - b. 意識面 (コミュニケーションの心理負担の軽減)
  - c. 気づき (直すべきところへの気づき)
- ⑥ OPP の効果 [プロダクト]
  - a. 言語面 (英語技能面での効果の実感)
  - b. 意識面 (コミュニケーションの心理負担の軽減)
  - c. 気づき (直すべきところへの気づき)

こうした分析により、「OPP を通じた協働学習の効果」の概念をより精緻化できたと考えている。この結果をもとに、我々は岩井他 (2016) で暫定的に作成された OPP の指導効果を理論的に説明するための仮説モデルを、以下のよう

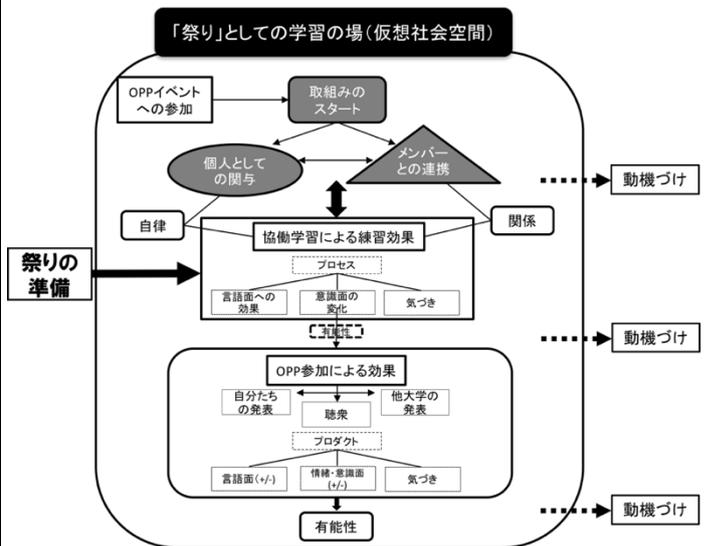


図 2

以上の結果を「祭り」の概念をフィルターに通覧してみると、以下のような考察が可能である。祭りとは：

「非日常」を参加者が意識する実践共同体において、「短・中期的ゴール設定」のもと特定の技芸の披露の応酬を期待される活動を立案、実行してゆく「コミュニティの発展的再生産」(三熊 2012)

である。この定義に照らし合わせると、上記の概念分類の中でまず「他大学との関係性」に大きな意味が見出せる。学生の反応の中に以下のようなコメントがあった。

「他の学校の色々見て英語のレベルとか内容もすごい勉強になった」

「他の大学が思った以上に英語に力を入

れているというか]

「他大学さんがやってるような物を・・・  
にもちょっと挑戦してみるのもいいんじゃないかなっていうふうに思った」

存在する英語学習コミュニティの中で構築してきた自らの成員アイデンティティが揺さぶられていることである。他大学との連携の中で、それぞれにある学習の進捗、深度の比較が起こる。それが刺激となって自らの取り組みを再構築しようとする意欲が見出せるからである。もう一つ大変重要なのは、上記の3番目のコメントが示す内容である。同じOPPを通じての協働学習ではあるが、それぞれの作品の傾向には違いがある。ある大学は演劇、別の大学はアカデミックプレゼンテーション、また別のグループはチャンツといった具合で、同じステージ上でのパフォーマンスでまるで別物である場合が多い。その際、他大学の発表内容にも興味を示すということは、自分たちの演技の輪郭を認識しているということである。「ウチは〇〇だね」という自己認識が明確になるということは、コミュニティのアイデンティティ形成がなされつつあるということであり、即ちそれを通じたコミュニティの発展的再生産が生起しているということが見ることが可能なのではないだろうか。

次に、情緒・意識面での向上が再参加意欲をかき立てている事実は、「中・短期的ゴール設定」を前提とする祭りの特質と見事に重なる。外国語学習は強靱な目的意識と継続性を要求する営みである。大切なのは分かっているにもかかわらずという連綿たる失敗の連続が英語教育史そのものと言っても過言ではない。この「意欲の息切れ」の特徴は、目標が遠すぎるということである。しかし、祭りは実生活でも半年に1度、あるいは1年に1度必ず巡ってくる。この周期性(periodicity)は英語学習に必要な継続と反復を担保してくれるOPPの特徴といつてよからう。

一般に「イベント」と呼ばれているものは、狭義の「祭り」からその構成要素のいくつかは脱落した催事であるが、このようなイベントを祭り論の射程に収めることが可能であり研究の目的と状況に応じて、あるときは祭りの構成要件を厳格に、また別のときは緩やかに適用すればよい、という指摘も祭り研究家の間なされている。その意味においてOPPはまさに「祭り」なのであり、この研究においては英語教育・学習における「祭り」の効果が提示されたと結論づけられる。

3年目は主に2年目までに得られたデータをもとにまとめた上記の論を成果として全国英語教育学会第42回埼玉研究大会にて発表した。会場は盛況で、協働学習やアクティブラーニングに関する具体的取り組みを追い求める研究者・指導者が多いことを示していた。また、前年度までの成果と合わせて全国英語教育学会第55回(2016年度)国際大会においてポスターセッションを実施、さらに光州(韓国)湖南大学で開催された国際学会(The 3rd

AILA East-Asia and 2016 ALAK-GETA Joint International Conference)でも発表され、国境を超えた多くの反響を得た。

最後にもう1つ重要なことは、研究対象の「テキスト」たる肝心の実践、つまりOPPの運営形態もこれまで以上に進化し、適切な機材を用いた次の指導につながる独自の実技記録法も開発したことは大きな実践面の成果であると言える。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 3件)

- ①岩井千秋、三熊祥文、平本哲嗣、二五義博、三宅美鈴、山中英理子、吉本和弘、堀部秀雄 (2016). 「Oral Presentation & Performance (OPP) のイベントを通じた協働学習活動とその教育効果の理論化」. 『大学英語教育学会中国・四国支部紀要』, 第13号, 1-18. (査読あり)
- ②三宅美鈴、山中英理子 (2016). 「OPP(Oral Presentation & Performance) イベント参加から得られた動機づけと教育的効果: 広島国際大学の場合」. 『広島国際大学 総合教育センター紀要』, 創刊号, 59-77. (査読あり)
- ③三熊祥文 (2015). 「レシテーションを中心に据えた TOEIC 系授業」. 『広島工業大学紀要教育編』, 第14巻, 57-67. (査読なし)

[学会発表] (計 5件)

- ①三熊祥文、二五義博、堀部秀雄、三宅美鈴. “Effects of an Oral Presentation and Performance Event as Matsuri” 2016年9月10日 於 Honam University, Gwangju, South KOREA.
- ②岩井千秋、堀部秀雄. 「JACET SIG on Oral Presentation & Performance 24 (JACET オーラル・プレゼンテーション&パフォーマンス(OPP)研究会)」. 『大学英語教育学会 第55回(2016年度)国際大会』, 2016年9月2日 於 北星学園大学. (北海道札幌市)
- ③三熊祥文、岩井千秋、三宅美鈴、二五義博. 「英語のオーラル・プレゼンテーション活動による協働学習(祭り)の効果-枷モデルの検証」. 『全国英語教育学会 第42回 埼玉研究大会』, 2016年8月21日 於 獨協大学. (埼玉県草加市)
- ④三熊祥文、二五義博、山中英理子. 「協働学習(祭り)によるオーラルプレゼンテーションの教育的効果」. 『大学英語教育学会 第54回(2015年度)国際大会』, 2015年8月31日 於 鹿児島大学 郡元キャンパス. (鹿児島県鹿児島市)
- ⑤三熊祥文、岩井千秋、平本哲嗣、二五義博、三宅美鈴、山中英理子、吉本和弘、堀部秀雄. 「OPP イベントを通じた協働学習活動とその教育効果」. 『JACET2015 中国・四国支部研

究大会』, 2015年6月6日 於 広島工業大学. (広島県広島市)

[図書] (計 3件)

- ①岩井千秋ほか(大学英語教育学会[JACET]中国・四国支部 Oral Presentation & Performance 研究会編著) (2017). 『OPP2016 報告書』 (129 ページ)
- ②岩井千秋ほか(大学英語教育学会[JACET]中国・四国支部 Oral Presentation & Performance 研究会編著) (2016). 『OPP2015 報告書』 (67 ページ)
- ③岩井千秋ほか(大学英語教育学会[JACET]中国・四国支部 Oral Presentation & Performance 研究会編著) (2015). 『OPP2014 報告書』 (107 ページ)

[産業財産権]

○出願状況 (計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

○取得状況 (計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

三熊 祥文 (MIKUMA, Yoshifumi)  
広島工業大学・その他の部局・教授  
研究者番号：10239212

(2) 研究分担者

岩井 千秋 (IWAI, Chiaki)  
広島市立大学・国際学部・教授  
研究者番号：60176526

二五 義博 (NIGO, Yoshihiro)  
海上保安大学校・国際海洋政策研院センター・教授  
研究者番号：60648658

三宅 美鈴 (MIYAKE, Misuzu)  
広島国際大学・保健医療学部・教授

研究者番号：50352034

山中 英理子 (YAMANAKA, Eriko)  
広島国際大学・保健医療学部・准教授  
研究者番号：30280168  
吉本 和弘 (YOSHIMOTO, Kazuhiro)  
県立広島大学・人間文化学部・教授  
研究者番号：90210773

堀部 秀雄 (HORIBE, Hideo)  
広島工業大学・工学部・教授  
研究者番号：30238802

平本 哲嗣 (HIRAMOTO, Satoshi)  
安田女子大学・文学部・准教授  
研究者番号：70280229

(3) 連携研究者

( )

研究者番号：

(4) 研究協力者

( )